

幸いなるかな、心の清きゆう

その人は 神を見る。

主イエス様は山上で垂訓で斯く教へられました。

鶴佐寧氏の地上の生涯はわずか五十九年ト西月十一日

六時十分に神のみ許に召せられました。今氏の生前之事

や最後の有様を考みると、心の清きゆう、其の人は神

を見た、との乍言が思い出されます。それ程後の生活様

式や病床の態度に清き心の反映がはつきり訪内者等

心に印象付けられたりであります。

寧さんは天文学に興味を持ち、天体観測する事が好

てありました。そして美しい天体や彗星に働く創造神

信じて居られた。故に彼は心の平安を保つすべてを

神にゆだねて死を征服されました。

寧さんは昨年八月に突然発病し直ちに入院切解手術を受けられましたが病勢は案外進行して手の筋肉様がんがつて

其の時寧さんは医者に「私は死ぬ事五決定したがいい

から真実を語って欲しい」との事で病名はシキニス

デヂスという血液が二つの一種で回復の困難な事と

宣告されました。然し彼は父の心痛を思、病気の重大性甚

速に父に知らされなかつた

寧元が召されたる前日病院を訪ねて私共兩人は彼が童

態で死を知つた。共に祈つて別れのひであるが、

彼は吉凶が笑み浮べて握手の手を差し送られました。

彼は自分の死が直前に迫つて居るにしか、やらす看

護婦や新婚の医者との前途を祝う贈物を志したが至

鶴佐元の代賓家に住む子供達を愛して、土壇が西奥山左

の隣字の端に金百両へて呉れとの言葉を附に書に召せられました。

此の美しい心やりの死は死を從容として迎える態

度に看護婦が心を打たれながらある。

病院にかけつけた私は未だ暖かい彼の頭の上に手を置いて

不平のない平安な心、心の清きゆうが見えた神さまの事五度

彼の永遠の生命の祝福十九の事五度

告別式当夜コアラの合唱した讃美歌に(一曲)

群れモ河の岸辺を 遊んでとモニル

ラモロやみの葛籠瓦 カミリ行く所ニシ

心安レ、神にモリテ 安レ、

左は鶴佐寧氏の追憶である。

寧はよく宇宙の事や国生の話をして相手任せで信じて居るから私が死んで悲しまない様にと少しとなく教へた事に今気が附きました。解剖の結果公害システィスが右脇に腫瘍込んで居て痛みも相当激しかった筈なのに一言も力のフレッシュ左半身の心う時は人に可憐そうであつた。

From Rev. Kono - 1964